



TITLE:

わが遍歴の旅

AUTHOR(S):

臼井, 竹次郎

CITATION:

臼井, 竹次郎. わが遍歴の旅. ドイツ文学研究 1971, 18: 99-109

ISSUE DATE:

1971-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184930>

RIGHT:

わが遍歴の旅

白井竹次郎

今からはもう二十數年前、戦後まださう時を経てゐない頃だつた。滋賀縣下の農村へ巡回講演に出かけたことがあつた。巡回講演などと云へば大袈裟で、あちこちで話をしただけのこと。何故引受けたかと云ふと、農村の青年に接觸する機會になると思つたからだつた。又その間に夜になつて農家に招かれ、そこで數名の青年と膝をつき合せて語る折もあつた。農村問題の悩みを聞いても助言などはできるものでなし、唯聞くだけに止まつたが、青年たちは懷いてゐる悩みを聞いてもらひたかつたのであらう。村から村へ移つたのだが、聴衆の少い時には、烏合の衆など來ない方がよいのですと言つて親みを寄せてくれるものもあつた。移動する時には誰かが自轉車の尻に乗せて運んでくれ、それもまた話合ふ機會となつた。そんなある時のこと、話の中で法然上人や私のキリスト教についての考へなどに觸れたが、その時に私はキリスト教を信仰するものではありませんがと斷りを言つてから話した。すると終つたあとで面會を求めて來た人があつた。父の代からキリスト教に歸依し、自分も信者であると同置きをして、私の話を聞いてゐるとどうしても信仰があると思へない、それなのに信仰がないと言つたのは何故か、そのわけが知り度いと云ふのだつた。私にとつては思ひもかけぬ質問だつた。そこで私は聖書は親んで讀む者であるけれども、信仰があるとは云へない。もし私の心の中で我信ずと云ふ告白がなされたら、

信仰を口にすることができるとあらうが、それまでは信じるとは云ふことができないと思つてゐると答へた。そしてそれからいろいろと話合つて別れた。

「念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜の心おろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきころのさふらはぬ」と嘆いた唯圓坊の不審に對して親鸞上人は「天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよく往生は一定とおもひたまふべきなり」と教へ、更に諄々と説いてゐる。唯圓坊は師の語によつて何を悟つたかは知らぬが、踊躍歡喜の心こそ信心と云ふことができるであらう。嘆異抄は親鸞上人の深い宗教體驗から説かれてゐる言葉であるから、凡夫にとつては有難い言葉であるが、わかるには困難である。いま聖書について言へば漸く親しき書になりかけた所であつて、信仰などはとても談ずることはできない。だがまあ聖書がどんな風にして私にとつて親しき書となるに到つたのであらうか。

聖書と云ふものを始めて手にしたのは中學の二年か三年の頃だつた。友達がこれを讀んでみろと貸してくれたものだつた。田舎の中學校には圖書室はなし、町には本屋が一軒きりで受験參考書を少し置いてゐるにすぎず、本は讀みたし本は無し。教へてくれる人もないのでどう讀んでいいかわからないが、聖書も本だ、ともかく開けて讀み出した。馬太傳の始めは人の名前ばかり、アミナダブをアミダブツと間違へるやうなことがあつた位で、何のことやらわからない。山上の垂訓あたりで漸く言葉の意味が出て來る有様では長つづきする筈がない。英語のリーダーに the prodigal son の話が出て來たことがあつたが、まだ英語を追ひかけるのが精一杯で話の意味など全くわからなかつた。返却したあとは聖書は手元になし、また讀みたいと云ふ心も全く起らなかつた。聖書の言葉として始めて耳の底に残つたのは高等學校に入つてドイツ語の時間にヘッベルの自傳を讀んだ時、「それ

てる者はなほ與へられ、有たぬものは有てるものをも奪はるなり」と云ふ箇所であつた。貧しかつたヘッベルの幼年期の記述の所で、ヘッベルはこれを字句のままに使つて貧しさの印象を深めた。まだこの時は聖書に手をのばさなかつたけれどもこの言葉だけは忘れなかつた。

大學に入つて獨逸文學を専攻することになつた。聖書と希臘神話は金科玉條である。義務として讀まなくてはならない。ドイツ語で讀まなくてはならないと強制して獨譯と和譯とをならべて四つの福音書を讀んだ。それは讀んだと云ふ実績を作るためみたいな讀み方だつた。そんなことでは近づけるものではない。だが辛抱してつづけてゐる中に何かおぼろげながら無縁ならぬものを感じ出した。何かつなぐものがある。嘆異抄を讀んだと云ふことが縁の糸であつたのだ。高等學校三年の時、當時の三高佛教青年會の主催で曾我量深先生を講師として嘆異抄を讀む會が作られた。と云つてもその時の私には嘆異抄と云ふのが何のことやら全くわからなかつた。讀書に關して最も多く語合つた友人が、おい出席しようと誘つてくれた。その博識ぶりに不斷から感心してゐた友人のことだから、そのすすめには直ちに從つた。大體から云つて自主性に乏しい私は讀書の方でも友人達に負う所が多い。本は讀みたし本はなしの田舎から都會に移つて來た私は本についての知識は友人達から注入されたのである。このことは今に至るまで變らず、殊に現代文學で知るものはみな誰かのお蔭である。親鸞上人は弟子を持たずと仰せられたが、私には師ばかりである。教壇に立つやうになつてからも學生に教へられて讀み始めたものもある。例へば明石海人と云ふ歌人を知つたのも戰時中に學生が歌集を貸してくれたからであつた。これは戰後に古本屋で見つけくり返して讀んだ。嘆異抄の場合でも友人があればいいものだから讀んでおけとすすめてくれなかつたら曾我先生の講義は聞きのがしたことだつたらう。地道な講義であつたから最後まで缺かさず出席した。

曾我先生に惹かれて聞いてゐる中に讀む喜びを覺えるやうになつた。それはたしかに一つの驚異であつた。わかつたと云ふのではない。一體わかるとはどんなことだらう。その時に達した段階しかあり得ない。だからわかると云ふことは決定的ではない。いつも動いて行く。わかつたと思つて喜ぶ。だが次にはわからなくなる。そしてまた別のわかり方が生れて来る。それがわかる道ではないのか。ともかく嘆異抄に道が通じたのである。この道は何度も歩むし、また別の道も通じるやうになる。この道がまた聖書にも通じる道でもあつたのだ。だからつなぎとなつたのである。

舊約聖書はそれからあとのことだつた。これにはトーマス・マンのヨージェフ四部作を待たねばならなかつた。長い病氣が恢復して大學院に籍をおいた時これの第一部が講讀に用ゐられてゐた。そのために創世紀はくり返して讀んだ。そして序でにモーゼの五つの書を通讀した。併し興味はトーマス・マンの小説に向けられたのであつて舊約はその序でにすぎなかつた。それでは面白くなる筈もないがこれも道中である。作品の源泉を探るためでもなく、引用を検べるためでもなく聖書をとり上げて讀んだのは戦時中のことであつた。聖書に親しむと云ふ經驗をしたのはこれが始めてであつた。聖書についての知識は全くない。またこれが教會に於てどんな役割を持つてゐるのかは何も知らない。青年時代には教會を訪れたい心は動いたが、信者でもないのにと氣おくれがして一度も足を入れたことがない。後にも先きにも儀式に參列したのは京都のギリシャ正教會の復活祭一度きりである。これも自分から出かけたのではなく信者であり、役を勤める友人に案内されたからである。私の聖書への道は獨學の者の歩みであるから随分と獨り勝手なものたるを免れない。正道か邪道か今以て知る由もない。

心に灼きついた言葉に會ふとそれは楔となつてつなぎとめる。聖書と契りを感じさせてくれた箇所の一つは詩

篇第五十一篇である。「神のもとめ給ふ祭物まつものはくだけたる靈魂たましいなり 神よなんぢは碎けたる悔いしところを藐あはしめたまふまじ」この詩句は私にとつて金槐和歌集の「塔をくみ堂をつくるも人のなげき懺悔にまさる功德やはある」と結びついてしまつた。と云ふよりも詩篇第五十一が私の心の中にあつたから金槐和歌集のこの歌が忽ち私の目を把へたのである。實朝の歌集を読んだのは戦後になつてからである。もう一箇所は福音書の中である。馬太傳の終りの方、第二十六章、「イエス憂ひ悲み出でて言ひ給ふ わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり……わが父よもし得べくばこの酒杯を我より過ぎ去らせ給へ されど我が意の儘にとにはあらず 御意のままに爲し給へ」路加傳では「イエス悲み迫り いよいよ切に祈り給へば汗は地上に落つる血の雫の如し」

聖書を讀んでキリストの姿が浮んで來たのはこの時が始めてあつた。どんな姿かと云つてもはつきりしたものではない。ツルゲネフは夢の中でキリストに會つたことを散文詩の中で語つてゐる。少年の日の村の教會堂、周りにゐるのは農民ばかり。その時に會つたキリストは顔形もしぐさも服裝に至るまで他のものとちつとも變つてはゐない。みんなと同じ朴訥な顔、恐らく日々の勞苦で刻まれた皺まで同じであつたに違ひない。ツルゲネフはキリストに隣人の親みを心の底で寄せてゐたのであらう。私には少年の日のこんな思出はないから姿が浮んで來ても顔は見えなかつた。後にルオーの繪を見て忽ち好きになつた。街のキリストと題する繪は忘れられない。顔はわからないが一ぺんにキリストだとわかる姿。ルオーの目は確かに見たのである。どこかで、そして到る處で、道化師の中にも、街の女の中にも。それほどキリストはルオーにとつて親しい人なのであらう。

約百記、ゲーテのファウストを讀むためには必要の書として開いた。それがいつの間に約百記そのものに興味が湧いて來た。童話として讀まうと試みたり、ブレイクの畫とならべて繪卷物風にしてみたり、マルチン・ブ

パーの獨譯を知つてからは言葉の使ひ方に興を覺えたり、など私にとつて約百記に近づく道は幾筋もあつた。そしてこれからいいくつかの道を試みるであらう。そして約百と云ふ人物に親みを加へて行くだらう。このなじみは法華經の中の常不輕菩薩へのなじみとつながつて来る。常不輕菩薩と云へばすぐ良寛和尚が離れない。「比丘は唯萬事はいらず常不輕菩薩の行ぞ殊勝なりける」と詠み、斯人以前無斯人 斯人以後無斯人 不輕老兮不輕老 令我人長慕淳眞と讃嘆渴仰する聲を聞くと和尚の前に菩薩が在し、法華經を誦する和尚のさながら菩薩に親しく語りかけてゐる様子が見えるやうである。良寛和尚と云ふ人は佛教については随分勉強したやうであるけれども専門家にはならなかつた人だとひそかに思つてゐる。それだけにこんな人がゐただけでもわが國に於ける佛教の根の深さがわかる。

この根の深さを感じることができなければ西洋に於けるキリスト教の根の深さを感じられないのではないだらうか。私は聖書についての知識はなく、また求めようもしない。ただくり返し聖書を讀むだけである。これは佛典についても同じである。學として學ばないのは怠慢である。聖書を讀んでもキリスト教に近づくのではない。まして神學に接近することは思ひも及ばない。唯レッシングの神學論文だけは私に聖書に一層親しむことを教へてくれたものだつた。だがこれは神學ではない、レッシングの哲學であり、思想であり、ここではレッシングその人が生き生きと動いてゐる。レッシングの文學と云つていいであらう、彼の文學作品よりもこの方に彼の天才が閃いてゐるのではないか。短い遺稿論文に「キリストの宗教」と云ふのがある。キリストの宗教とキリスト教は別物である。キリストの宗教に目を向けたからこそ「人類の教育」が生れたのである。私が聖書を讀むうちにキリストに接することができるやうになつたのはレッシングのお蔭と云はねばならない。

心の琴線から鳴り出るひびきに親身に觸れたい、理解はそこから始まると思ひ出したのはいつ頃からであつたか。異國のものに親密感を得ようとするには時間をかけねばならぬ。三十代までは勉強さへすればだんだん近づいて行けるだらうと思つてゐた。それが四十代になつて近づく筈のものが遠のくとしか感じられなくなつて來た。努力の不足は云ふまでもないことだが、せめて一步でも半歩でも近づくと感じられたらもつとやらうと勵みも出たらうが、手の中の砂で、握るとこぼれてしまふ。指の間から砂のこぼれ落ちる感觸は何とはかないものであつたか。道に迷へば足を止めるのも一つの方法である。觸れ合ふには觸れ合ふものがなければならぬ。松のことを松に聞くには聞く耳がなくてはならぬ。キリスト教の傳統の深さを感じるにはわが裡に佛教の傳統を感じずしては無理であらう。傳統と云ふ限りは特定の人に止まらず、すべての人に宿るものでなくてはならぬ。すべてと云へばこのわが胸裡にも存してゐる筈である。そのある筈の音が聞えずしてどうして外の音が聞えるであらうか。

勿論それは身の程知らずの夢ではあるが、成る成らぬは別問題として心がけるだけでもいいではないかと一旦止めた足をまた動かした。前へは進まずに横道へそれてしまつたのかも知れない。足も老いて來た、急ぐことはできなくなつた。ゆつくりして楽しむことができたならそれもよからうと歩き出したら面白味が出て來た。但し横道だから學問研究とは云へないだらうが、例へば私のやうなものが萬葉集に興味をもてばそれは萬葉集がすぐれたものである所以で、すぐれたものをたとへ初歩的であつても、すぐれたものとして感じることも大切で、さうでなければすぐれたものもあつてなきが如しになるのではないか。古人も初心忘るべからずと教へてくれた。尤もこれは名人の域に達した人に向つて言つた言葉で、初心を一步も出ないもののためではないが。

西東詩集の中の有名な詩 *Selige Sehnsucht* は學生時代からなじみ深いものである。今それを改めてとり上げ

てみて、さて題はどんな意味であらうか。一應自分勝手な所から手をつけて行く。まづ戀の歌一つ引用する。戀せずば人は心のなからましもののはれもこれよりぞ知る　心なくしてはもののはれはわからない。戀ふ心なくしてはもののはれは無縁である。Sehnsuchtは戀ひこがれる心である。そこで題の意をもののはれと受け止める。戀の歌と解する。戀の歌は合歡の歌、眞言祕密である。だから詩人はみだりに語る勿れと歌ひ出す。

Sagt es niemand, nur den Weisen,

Weil die Menge gleich verhöhnet,

と云ふわけは

Das Lebend'ge will ich preisen,

Das nach Flammentod sich sehnet.

いのちの歌だからである。玉の緒よ絶えなば絶えねにひびく玉の緒の太さ、その故にこそ忍ぶ戀の強さが調べに出て来る。もののはれは弱い感情ではない。焰に飛び入る一如の體驗にこがれ、あこがれる生の讃歌であるからである。

In der Liebesnächte Kühlung,

Die dich zeugte, wo du zeugtest,

Überfällt dich fremde Fühlung

Wenn die stille Kerze leuchtet.

あかねさす　ともしびの火の　まじろがず　闇を照せば　あなにやし　奇しき心ぞ　わが胸に　湧きてあふる

る　とどめかねいよ

Nicht mehr bleibest du umfangen

In der Finsternis Beschattung,

Und dich reißet neu Verlangen

Auf zu höherer Begattung.

うはたまの　夜のすずろに　生まれ来て　また生みつくる　まぐはひの　闇のうつに　とらはれて　ありし
も今は　とまり得ず　願生彼國の　夢あらた　心は惹かれ　あくがれてゆく

Keine Ferne macht dich schwierig,

Kommst geflogen und gebannt,

Und zuletzt, des Lichts begierig,

Bist du Schmetterling verbrannt.

千里をも　一里となすは　戀の道　飛びたち惹かれ　ひさかたの　光ががれて　あはや手に　とるもおそしや
火とり蟲　たちまち燃えて　失せにけるかな

最後の一節は詩人の與へる教訓である。だが説くも説かぬも眞言祕密の偈の一句は *Stirb und werde!* である。
selige Sehnsucht をものあはれとかけて、*Stirb und werde!* を煩惱即菩提と解く。

Und so lang du das nicht hast,

Dieses: *Stirb und werde!*

Bist du nur ein trüber Gast

Auf der dunklen Erde.

と詩人は私たちに語りかけ誘ふのである。誘ふは彼國である。焼け失せて甦る不死の國、闇よりこがれ、光に吸寄せられて、光と一如の合歡の讚美の歌聲こだまする彼國へわれらを誘ふのである。 ein trüber Gast auf der dunklen Erde はまさしく煩惱具足の凡夫われらである。誘ふ聲の餘韻には ぎやてい、ぎやてい、はらぎやてい、のひびきがこもりはしないか。羯諦 羯諦 波羅羯諦は般若波羅蜜多の呪、誘ひの聲である。去け 去け 彼國へ去け 波羅僧羯諦 みんな残らず彼國へ 菩提薩婆訶 ぼうちそわか これぞ正道いざ急げ。

色卽是空である。卽ち空卽是色、表裏は一體で、彼岸も此岸も別ものではなくなる。闇より出でて光へ、だが光の國に来てみれば、光と闇とは別れたのではない。また再會するのである。再會の抒情詩は同じ西東詩集にある。その結び

Beide sind wir auf der Erde

Musterhaft in Freud und Qual,

Und ein zweites Wort: „Es werde!“

Trennt uns nicht zum zweitenmal.

會ふは別れの始まり、とすれば別れは會ふの始まりでもある。會うて別れて戀ひこがれるは天地創造の祕密。光あれと神告たまひて光は闇より別れ、天と地は相離れたが、われても末に合はんとぞ思ふ願は天長地久。會ふ喜びも相離る苦もまた同じ戀ゆゑにである。「大日の種子よりいでて三昧耶形さまやぎやうまた尊形となる」これ

を象徴と聞くことはできないであらうか。火とり蟲は譬喩にしても目に見えるのである。目に見えるは一度きりであるが、その裡に無限のくり返しを含めて見れば象徴である。永遠の相である。大日如來の種子よりいでて三昧耶形、そしてそれはまた尊形となる。詩人は象徴を見る。

私は私の遍歴について述べようとして筆を執つたが、筆の方が遍歴をして、筆の行くままに手が随ふことになつてしまつた。これが隨筆と云ふことか、足どりが亂れてゐるので亂筆かも知れぬ。元來歩くのが好きで、別に變つた所、珍しい所でなくとも、平凡な所でよい、とにかく歩くだけ。足が歩くだけでなく、頭の中も歩いてゐるやうだ。そしてまだこれから歩きつづけようとするのである。これが私の奥の細道である。詩人芭蕉が奥の細道に入つて詩の大道を見つけた眞似などできるものではないが、木の根を踏み、葛藟を分けて行く位はしたい。若い頃は大器晩成を座右の銘と心がけた。ところが大器にならぬ中に日が暮れかけ、その頃になつてこの言葉が老子の中にあると知つた。晩成とは未完成と云ふ意味とのこと。これは有難い。若い時には前途の光明として頼つた言葉が意味をかへて老後の慰めとなつた。未完成を未熟に置きかへ、ついでに重荷がこたへるやうになつたから大器の大をとつてしまつたらどうだらう。器はもとよりわが器である。器は大ならずとも未熟は熟するを待つがよからう。熟さなかつたらどうしよう。ゲーテは遍歴時代の人々を *die Entsagenden* と呼んだ。嬉しい言葉である。良寛和尚は「わたしにし身にしありせば今よりはかにもかくにも彌陀のまにまに」と云ふ歌を遺して下された。これを笠に書きつけてわが遍歴の旅をつづけよう。